

琉球大学学術リポジトリ

教科等の特質を生かした現代的な諸課題に対する授業づくり—社会科， 道徳科，
総合的な学習の時間を中心に—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, 貴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019866

教科等の特質を生かした現代的な諸課題に対する授業づくり

—社会科，道徳科，総合的な学習の時間を中心に—

Creating lessons that make the most of the characteristics of each subject to deal with contemporary issues, Focusing on Social Studies, Moral Studies, and Period for Integrated Studies

玉城 貴子

Takako TAMAKI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立仲西小学校

1. テーマ設定の理由

子どもには、現在や未来の社会生活の中で起こる様々な社会的事象についての課題を把握し、その解決に向けて主体的に関わりをもち、自己の生き方について考えてほしいと願っている。しかし実際に社会科と道徳科の授業を行いながら、子どもは現代的な諸課題だけでなく、自分たちの生活について関心が薄いかわからないことの多さに気付いていくことがある。

また、そう願いながらもこれまでの筆者自身を振り返ってみると、子どもが社会について継続的に考え、主体的に関わり続け、自己の生き方を考える授業づくりができていない点も課題として挙げられる。

今後の変化の激しい社会を見通した『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）』（以下、「学習指導要領」）の特長は、学校教育において、子どもを「持続可能な社会の創り手」として育てる教育（ESD）の理念のもと、教育課程では「生きる力」を三つの資質・能力の育成に整理したことである（文部科学省2018a）。子どもが「持続可能な社会の創り手」として育つには、社会に主体的に関わり、未来を創造し、社会や自分の人生をよりよいものにしていくことを考え続ける力、自己の生き方を考える事が必要となってくる。

そこで、人間関係や社会との関わりを基盤にしている社会科、道徳科、総合的な学習の時間において学習指導要領でも示されている現代的な諸課題について、子どもが他者と協働しながら向き合う事で、将来、社会で起こる様々な出来事に主体的に関わり、自立した人間として平和で民主的な国家及び社会の形成者として、さらには「持続可能な社会の創り手」として育つと考え、本テーマを設定した。

2. 研究の目的

本研究では、社会科、道徳科、総合的な学習の時間において、子ども自らが社会に目を向け、自己の生き方について選択・判断できるようにするためにはどのような授業づくりを行えば効果的かについて考察することを目的とする。

3. 研究の方法

社会科、道徳科、総合的な学習の時間の中で、現代的な諸課題を取り上げた単元や教材において子どもが問いをもち、対話を通して自己の生き方を選択・判断する場を設ける授業を構想し、実践を重ね、子ども自らが社会に目を向けることができたかについて振り返りを中心に検証していく。

4. 本研究に関する理論的な背景

(1) 現代的な諸課題を取り扱う道徳科の時間について

『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 特別の教科 道徳編』（以下「道徳編」）に挙げら

れている現代的な課題は多岐に及ぶが、「持続可能な発展を巡っては、環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があり、これらの問題は、生命や人権、自然環境保全、公正・公平、社会正義、国際親善など様々な道徳的価値に関わる葛藤がある。このように現代的な課題には、葛藤や対立のある事象なども多く、特に「規則の尊重」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際親善」「生命の尊さ」「自然愛護」などについては現代的な課題と関連の深い内容であると考えられ、発達の段階に応じてこれらの課題を取り上げることが求められる」（文部科学省 2018b: 99）とある。さらに、そういった課題に対して子どもをどう育てていくのかという点については、「答えが定まっていない問題を多面的・多角的視点から考え続ける姿勢を育てることが大切である」（文部科学省 2018b: 99）とし、学びを通して社会に目を向ける子どもの育成が重要視されている。

以上を踏まえ、道徳科では各教科等で「学習した道徳的諸価値」を子ども達が自己の生き方という視点から捉え直すことができるよう問題解決的な学習を取り入れ、考え議論しながら多面的・多角的な見方や考え方に触れ、社会に目を向けることができるような授業を構想した。

(2) 現代的な諸課題について考える社会科の授業実践について

鈴木正氣（1978）は、「久慈の漁業（5年生）」の実践において、地域の漁業について自然資源・生産用具（漁船）・協同労働の三つの見えやすい対象から調べ、その変貌を工業との関連からおさえることによって、見えにくいものである地域から日本の産業を捉え直すために思考し判断する授業を展開した。

若狭蔵之助（1984）は、「公園をつくらせたせっちゃんのおばさんたち（6年生の政治学習）」の実践において、子どもは身近にある公園がどのようにして作られたのかを追究する中で、「真の政治主体」として母親達が要求を掲げて行動を起こす姿から、見えにくい国民主権の具体像に迫っていた。

霜田一敏・有田和正（1973）において有田は、「小倉の町のゴミ（3年生）」の実践において、学習は生活を追究することに意味があるという考えのもと、目に見える具体物（道具や施設）を追究させることで、ゴミ処理と市民生活の関係から、市役所の仕事の人々の願いを実現する過程に行政の根本があることを考えさせている。

以上の実践を踏まえ、社会科では社会的事象において子どもが問いをもち、具体物を追究しながら現代的な諸課題の中にある相互関係や概念（若狭実践の「真の政治主体」に相当）等の見えにくいものを見たり、自己や他者との対話を通して自己の生き方を選択・判断したりする場を設ける授業を構想した。

(3) 総合的な学習の時間について

総合的な学習の時間では、『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 総合的な学習の時間編』（以下「総合的な学習の時間編」）では、実社会や実生活とのつながりを持ち、具体的な活動や体験をしながら、生活の中に見えてくる問題や事象について多面的・多角的に考えることができる教材が望ましいとされている（文部科学省 2018c: 110）。そのような教材のもとで、「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける」（文部科学省 2018c: 10）ことができれば、社会に目を向け、自己の生き方を選択・判断していくための資質・能力を育成することにつながっていくと考え、授業を構想した。

(4) 道徳科、社会科、総合的な学習の時間を組み合わせるよさについて

これまでも道徳科を学校教育活動の中でどう位置付けると効果的かという研究がなされてきた。押谷由夫（1999）は、あるねらいに沿った教育活動の中でそれに関わる道徳の時間を計画する「総合単元的な道徳学習」を提唱している。また上地完治（2020）は、学校教育で目指すべきこととして「道徳や他教科の学習を個別に実施するだけでなく、そうした学習を通して持続可能な社会の未来の市民として、また平和で民主的な社会の市民として育てること」と述べている。

以上の研究を参考にしながら、社会科、道徳科、総合的な学習の時間において現代的な諸課題を取り上げ、それぞれの教科等が対象としている社会に子どもが目を向ける授業を展開した。

5. 研究内容

(1) 各教科の特質と指導計画

表1 社会科, 道徳科, 総合的な学習の時間の特質 (下線部は筆者による)

社会科 (「目標」より抜粋)	道徳科 (「目標」より抜粋)	総合的な学習の時間 (「目標」より抜粋)
社会的事象を多角的に考察することや複数の立場や意見を踏まえて選択・判断することを通して、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養う。	道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。	探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。

表1で示したようにそれぞれの教科の特質を生かしながら、社会科では学習したことから子ども自らが選択・判断すること、道徳科と総合的な学習の時間では自己の生き方について考えを深めることを三つの教科の共通点として意識しながら授業計画を立て研究を行った。

表2 現代的な諸課題を取り入れた授業計画

	1 学期	2 学期
社会科	『県の地図を広げて』 沖縄県の産業、工業、交通の広がり、渋滞について考える。	『ごみはどこへ』 ごみの処理を通して、健康なくらしとまちづくりについて考える。
道徳科	『お母さんのせい求書』(家族愛、家庭生活の充実) 『アメリカとの出会い ジョン万次郎のぼうけん』 (国際理解、国際親善)	『雨のバス停留所で』(規則の尊重) 『いいの日』(生命尊重・平和) 『道子の赤い自転車』(規則の尊重) 『友だちが泣いている』 (善悪の判断、自律、自由と責任)
総合的な学習の時間	『水はどこから』 水がどこからくるのかを通して、健康なくらしとまちづくりについて考える。	『石っこけんさん宮沢賢治』(自然愛護) 自然と自分たちの関わりについて話し合い、身近なところからできる事を考える。 『つながっている日本と外国』 (国際理解、国際親善)
現代的な諸課題について考える授業づくり	単元名『浦添市の環境を守り、よりよい浦添市をつくっていこう』 「私たちが住む浦添市の環境のすばらしさや、住みやすいまちづくりに向けて環境に関わる人々の工夫や努力を知ることを通して、誇りをもち、市に貢献する態度を育成する。」 ・環境に関する問いづくり ・情報収集 ・情報の交流	
	専門家からの学びと体験活動 ・カブトムシ学習 ・生ごみ堆肥について	専門家からの学びと体験活動 ・やんばるの森の学習 ・水づくり実験 ・情報の収集、分析、まとめ表現

社会科や道徳科での学びや思考と関連させながら、子どもの目がさらに社会に向くことをねらいとして、総合的な学習の時間において専門家からの講話や体験活動を行った。表2の枠で囲んだ部分を中心に実践報告を行う。

(2) 検証方法

現代的な諸課題について考え議論しながら多面的・多角的な見方や考え方に触れ、自己の生き方を選択・判断するために効果的と考え、問題解決的な学習を重視した授業展開を構想し、子どもの発話、授業後の振り返りで見取り、検証した。

6. 検証授業

(1) 第4学年 社会科～健康なくらしとまちづくりについて考える授業実践『水はどこから』～

社会科では、図1に示す上田薫(1952)の学習者と学習対象の「たがいに働きかけあう相互の関係」とさらにそれらをつなぐ「具体性」(上田 1952:30)が授業を行うために重要であると捉え授業づくりを行った。社会的事象について子どもが関心や考える必要性をもつように、実物を見る、校内・校外の見学、触る、飲む等子どもが具体物を通して考え、そこから導き出される疑問について議論し、選択・判断する学習活動を展開した。

ダムや浄水場の学習を終えた第8時以降は、主に森林や水の汚染、節水といった現代的な課題について取り上げながら学習した。第8時の学習後におけるA児の振り返りを考察する。

森林を手入れしなかったら、しぜん、生き物、水がなくなるので、森林を手入れすることがとてもだいじだということがわかりました。理科や国語と社会をつなぎあわせて、森林や水のことをして、ごみをひろったり、きれいなしぜんを守るために、自分がやっている緑の少年団をがんばってかつどうすることが、今、自分のできることだと思いました。(A児)

A児の振り返りには森林という学習対象について自然、命、水を生み出す場所として捉えている事が分かる。さらに社会科と他教科を結び付けるだけでなく、学びと生活を結合させ、今やっている事の価値やこれから自分がどうあるべきかを考えている。またA児は道徳科『石っこけんさん官沢賢治』において以下の様に考え、総合的な学習の時間でも海の水の汚染について調べ、考察している。

私は、ボランティアだけじゃだめだと思います。なぜなら、ボランティアしても、ポイすてしたり、食品をむだにする人は、あまりへらないと思ったからです。でも、ボランティアがいい、今の生活をくずさず、自然はかいもしないことは、考えてもすぐにはでてこないの、今もやっている節水や、3Rをひろめていくしかないのかなと思いました。(A児の道徳科「石っこけんさん官沢賢治」の振り返りより)

A児は道徳科で、「ボランティアする人よりもボランティアしない人の方が多い」という他者の意見と

表3 単元「水はどこから」授業内容

時	学習内容 (下線部は現代的な諸課題として取り上げた内容)
1	家や学校で使われる水の用途や量を調べる。(生活をさぐる)
2	生活の中で使う水がどこからくるのかについて学習問題をつくる。(追究課題を立てる)
3	水源やダム、浄水場などの水道に関わる施設に着目し水の経路について調べる。
4~7	浄水場の仕組みや働く人の仕事の工夫に着目して浄水場の役割を捉える。 利き水(水道水と市販の天然水)をする。(知る、調べる)
8	<u>ダムと水源の森林の働きに着目して、それらに共通する役割や機能をとらえる。</u> 倉敷ダムが建設されたことでふるさとに戻れなかった人がいたことについて知る。
9~10	<u>水源の森林の保全に努める活動に着目し、水を守るための取り組みを調べる。</u>
11	水道管の役割や水道管を守る人々の工夫や努力に着目して、 <u>水道の普及が公衆衛生の</u>
12	<u>向上に果たした役割について捉える。</u> (見る、知る、調べる)
13	<u>使った後の水のゆくえと下水処理施設のはたらきに着目して、水源から下水処理されるまでを総合的に振り返り、水の循環を捉える。</u> (見る、知る、調べる)
14	地域の人々の水の使用量の変化に着目して、 <u>節水の取り組みが進められていることを捉える。</u> *過疎地域の水道整備問題について(知る、考える)
15	大単元『健康なくらしとまちづくり』の学習を終えて、ごみの減量や節水を生活の中で実践し、思ったことや感じたことを話し合い、今後の自分たちの行動について考える。(社会科新聞に表現)【選択・判断】
16	
17	出来上がった新聞をもとに友達と交流し、学習を振り返る。(自己評価・相互評価)

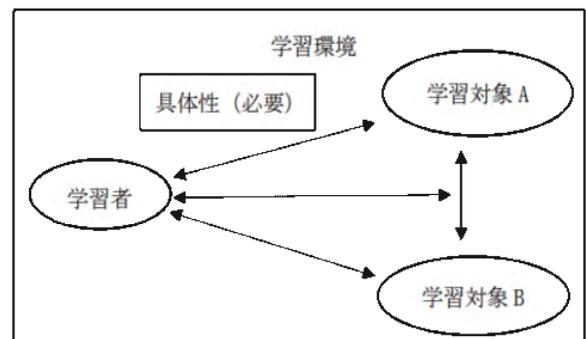


図1 学習対象と学習者の関係(上田 1952)

併せてポイ捨てをしないことや食品を無駄にしないことの難しさに気付き、自分のやっていることを続けていくしかないかと振り返っている。総合的な学習の時間に個人課題で海のごみの量について調べ、ごみの増加により海のごみ問題も深刻であるという事実を学んできたことに関わらせた発想となっている。

第14時で、過疎地域の水道設備問題について考えた授業では、人口減少による水道管の交換費用が足りない地域があることを資料で提示すると、「高齢化が人口減少をまねいている」との子どもの発言から、議論となった。ここではまず高齢化がなぜ人口減少につながるのかについて考えた。子ども達は「結婚する人がへっているから、子どもがへっている」と発言し、日本が高齢化していることに気付いていた。過疎地域の水道管の交換に対して高齢化という現象と人口減少をつなげて考えたA児は、

私たちがなにげにつかっている水道水でも、人口がへって、水でこまっている地いきもあるとしてびっくりしました。昔は雨水、カー、ヒージャーで子どもが水をくみにいっていたんだけど、今は、近くに水道があつてかんたんに水を使えるようになって、べんりになったんだなあと思いました。でも、今は、昔とちがう問題がでてきてたいへんなんだなあと思いました。(A児)

と振り返り、安全・安心な生活のために行う水道管の交換の向こうにある地域の人々との関係について考えることができた。

また、子どもの中には環境に関する課題に目を向け、「振り返り」として次のようにまとめた子もいた。

水を大切につかい感しゃをする。水をかんりしてくれる人にかんしゃする。水などをむだにしない。私が知っていることは水がつかえる国は、15こだけだと聞いたことがあるから水を大切につかおうと思います。(B児)

B児は道徳科の授業が好きで、『ごみはどこへ』の単元から一貫してごみ処理や水道設備に関わる人々に感謝の思いをもって注目し続けていた。ここでも、安心して水が使えるのも管理してくれる人がいるからだと考えている。さらに、「なぜ水が使える国が15こだけだと知っているのですか」とたずねたところ、自分で疑問をもち調べたのだと言っていた。外国との関係について考えた道徳科の学習において「外国にあまり目を向けたことがない」から仲良くなれない国があるのではないかという意見をもっていったことから、外国に目を向け調べたと考えられる。B児は学習後、「戦争が起こると平和じゃなくなるから外国との物の行き来も難しくなる。だから平和がいいな。沖縄戦についても知りたい」と沖縄の戦争と平和や文化、伝統行事に課題意識や興味をもち、沖縄について書かれた文献を読んでいる。

水をよごさないために、ティッシュで食品をふいても、ごみがふえる…ふくざつ(C児)

C児は「社会科は生活とつながっていて、自分の生活の事を勉強するから好きだ」と語る子である。この振り返りを書いた授業では、多くの子どもが「ティッシュで汚れを落して食器などを洗えば水が汚れなくてすむ」という意見を出したところ、「先生、でも、ティッシュがごみになりますよ」と発言し、道徳科の授業で議論になる葛藤や対立がここでも見られたのである。C児は「ふくざつ」と書いていることから、子ども達は環境の問題は難しいことに気付いていったと考えられる。さらにC児は、

このままだと、自分たちがとりくんできた、学習してきたことをやらないと、かわらない。しかも、この先も悪化していくと思った。自分たちの生活を作ってくれている人、しせつ、物に感しゃ。だから、これからもとりくみに手伝いたい。(C児)

と書き綴っていることから、環境の問題は難しいが、自分たちがやっていくしかないという考えをもつことができおり、社会に目が向いている姿と捉える事ができる。

また本実践を通して、B児の様に、他の数人の子どもが地域にある井戸の取材や祖父母が子どもの頃はどのように水を得ていたのか等、課題意識をもって自主的に調べてくるようになったことも成果である。上田(1952)の学習者と学習対象の「たがいに働きかけあう相互の関係」とそれをつなぐ「具体性」を重視したが、子どもの発言や振り返り、学校を飛び出して学ぶ姿から考察すると、やはり具体的に考え、議論していく事が社会に目が向くための授業づくりにおいて効果的であると考えられる。

(2) 第4学年 道徳科の授業実践 道徳科『石っこけんさん 宮沢賢治』(内容項目：自然愛護)

本教材は、故郷の自然を愛した宮沢賢治について書かれた文章と、学びを広げるために「未来へ残したい、かけがえのない自然」と題して世界自然遺産に登録された地域が提示され、環境保全への関心を高めることができる構成となっている。

上田(1952)は、道徳教育とは「知的なものを正しく媒介にすることによってのみ、道徳的態度はより高きものとなることができる」という「知と徳の結合」が重要だと繰り返し述べている。社会科『ごみはどこへ』、『水はどこから』、総合的な学習の時間『環境学習』での知的な学びが子ども達のもつ道徳的諸価値にどうつながっているのかについて検証をした。

授業の構想(表4)を立て、導入部において、故郷の自然に小さいころから親しんでいた賢治が生み出した名作には自然の生き物が数多く登場するということを知り、教材をもとに自然への賢治の思いを話し合った。子ども達は自然からの癒しや自然の中で生きている生き物などへの生命の神秘について話し合いながら、自然を大切に思う賢治の心に共感していく姿が見られた。自然と自分たちの関係性について問うと、「自然は大切なもの」というもとからもつ認識の上に、社会科『水はどこから』で、子ども達はやんばるの自然から水が生まれている事や緑のダムとよばれる森林の役割について学んだことが結び付き、自然と自分たちの生活はつながっており、「自然があるから人間や動物も生きていける」「自然は水をつくる、緑のダム」などの答えが返ってきた。

自然への思いを話し合った後、展開部において、現代的な課題である自分達の生活の豊かさと自然が失われていく現実について考えさせるために、世界自然遺産について書かれている教科書教材を使って、「では、みなさんは大切な自然を守るために今の便利な生活をあきらめるのですか」と発問した。するとほとんどの子どもが今の生活をあきらめる事は無理だと考えていた。つまり、自然は大切だが自分たちの生活は今のままがよいという「道徳編」で示されている対立や葛藤に突き当たったのである。そこで、各教科等で「学習した道徳的諸価値」を子ども達が自己の生き方という視点から捉え直すことができるよう「自分たちの生活との関係を考えながら、自然を守るためにできる事は何か」という学習問題を設定し、子ども達が考え議論しながら多面的・多角的な見方や考え方に触れる問題解決的な学習を展開した。社会科や総合的な学習の時間の学習の中で、環境を守るために「ボランティア活動をする」「ポイ捨てをしない」「節水をする」などの意見が見られたが、この授業でも同じ様な意見が出された。また、「電気自動車をつくる」という意見も出てきたが、それに対して「自分たちにできる

表4 『石っこけんさん 宮沢賢治』の授業展開

	学習活動と主な発問
導入	・教材を読み、宮沢賢治の自然への思いについて話し合う。
展開	・自然とは何かについて、子どもの認識を確認する。(自然と自分達(人間)の関係について考える。) T「みなさん、自然って大切ですか?」C「植物から酸素が出て、人間が生きている。」 T「自然がある事で動物も人間も生きていけるんだ。自然との関係が見えてきたね。」 C「緑のダムもあるよ。」(社会科での学びが見える。)T「緑のダムもあるね。社会の勉強とつながってる。」 C「自然は材料にもなる。」C「野菜も食べれなくなる。」C「水も飲めなくなる。」C「動物がいなくなったら普通の暮らしが出来なくなるんじゃない。」 ・生活の豊かさと失われていく自然について考え、議論する。(教科書教材の提示) T「みんな、今の生活をあきらめて、原始時代みたいな生活しよう。」C「え、やだ〜。」 T「ゴミもばいばい出でさ。排気ガスもばわ〜と出で…。でも豊かな生活あきらめたくないでしょ。」 T「自然のためなら今の生活をあきらめる人?」(5名ほど手が挙がる。) T「今の生活をあきらめるのは無理な人。」(ほとんどの子が手を挙げる。) C「何かを頑張ればいい。」T「何を頑張るの?」C「電気自動車とか作ったり…。できる事をやってみる。」 C「ボランティアとか…」C「ボランティアだけじゃだめだよ。」 T「ボランティアだけじゃダメという意見がありますよ。」 C「ボランティアする人よりボランティアしない人の数が多い。」C「排気ガス出す人の方が多い。」 C「ボランティアじゃなくて、電気自動車とか…。自然がだめにならないような工夫をする。」 C「それさ、自分たちで出来るの?電気自動車とか作れる?難しい。」 T「子どもは電気自動車とか作れないって言ってるよ。みんなに出来る事ってなんだろう。」 C「ボランティア!」T「でもボランティアってなかなかできんよ。」C「節水」C「歩く」C「ごみ拾い」
終末	・やんばるの森が世界自然遺産に登録されたことを新聞記事で紹介し、身近な自然を守る事について話し合い、それぞれの考えをまとめる。(社会科「水はどこから」でやんばるの自然について学習)

のか」という意見も出された。また「ボランティアだけじゃだめだよ」という意見から、「自然がだめにならない工夫」や「自分達でできる簡単な事」は何だろうかと考え議論しながら多面的・多角的な見方や考え方に触れ、社会に目を向けつつ、自己の生き方を選択・判断していた。

終末部では、沖縄県で発行された新聞記事を使って、沖縄島北部（やんばる）が世界自然遺産に登録されたことを提示し、身近な自然と自分達は今後どうあるべきかについて、授業で学んだことをもとに振り返りにまとめた。

ボランティアだけでは、自ぜんは守れないと思います。なぜなら、他の国の人も自ぜんを守るように意しきしないといけないと思ったからです。(D児)

D児は、授業で「ボランティアだけじゃだめだよ」と議論がはじまるきっかけをつくった子どもである。社会科『水はどこから』で森林の役割を学び、節水を心がけたいと振り返り、総合的な学習の時間には地球温暖化について調べ、自分にできるCO2の削減方法を考えていた。だからこそ自分にできることと自分達だけでは難しいこともある事実気付き、このような「他の国の人も自ぜんを守るように意しきしないといけない」という考えをもったと考えられる。

この授業で、子ども達は自然と自分達の生活の関係の難しさ、科学技術の進歩に伴い安易に電気自動車などの科学の力に頼ろうとする社会、誰かがやるだろうという思いの強いボランティア活動等どこか他人事の提案に真正面から議論をしている姿が見られ、葛藤や対立のある中でも社会に目を向けていた。社会科で、沖縄県の渋滞がもたらす問題やごみを減らしていくこと、森林や節水、水を汚さない生活について考え、議論してきた子ども達だからこそ、道徳科の学習において、社会科での学習を媒介として人間の弱さを理解しつつ、社会に目を向け、子どもの自分にできる事は何だろうかと真剣に考え、議論する姿が見られた。上田(1952)の主張する道徳教育における「知と徳の結合」という子ども達自身による他教科での学び(知)が積み重なり、心(徳)と結合し環境と自己の生き方について考えを深める事ができたと考えられる。また上地(2020)はSDGsの問題は「難問」であるとした上で、「道徳科の授業のねらいとしては、こうした難問の解決よりも、問題それ自体の理解や、その問題に対する多様な意見の存在、そして、自分とは異なる意見に対する理解を深めることのほうが適しているといえる」と述べている。どのような現代的な諸課題が身近にあるのかを知り、それを自分たちの問題として他者と協働して考え、議論してきたからこそこれからの自己の生き方について考え、選択・判断できたのだと考える。

(3) 第4学年 総合的な学習の時間(テーマ「環境教育」)の授業実践

単元名『浦添市の環境を守り、よりよい浦添市をつくっていこう』では環境教育がテーマとなっており表2に示すように総合的な学習の時間の特徴をもとに、社会科、道徳科との関連及び外部人材の活用に留意し単元づくりを行った。課題設定の段階では、社会科で学んだごみや水の問題、道徳科での学びを中心として、それらから広げた課題を設定した。深める段階では、社会科と道徳科を関連させながら、環境問題の現状について調べたり、環境に関わる地域の方から話を聞いたりして課題を追究し、選択・判断する場を設け自己の生き方について考える授業を行った。三つの教科を関連させて思考を深めているE児について考察する。

個人課題「森や木を守る取り組み」

ぼくが思ったことは、森は大切にせず、たくさん切らなくて、木は人工林にして、そこから木をとったら、しぜんの森は切っていないから、人間と動物たちも安全だし、森からサルとかもおりてこなくなるから、森は大切にしないといけないと思った。それから、森もむげんにあるわけではないから、やっぱり人工林がすごくいいなと思いました。

E児は、社会科『ごみはどこへ』で「ごみは身近にあるからこそできることはやって地球温暖化を止めたい」と考えていた。しかし、生ごみ堆肥に取り組む方との学習で、「生ごみをへらしてひりょうにするのは、おじいちゃんがやっていたから、とてもかんたんだと思っていたけど、大石さんから話を聞いた

ら、しっばいもたくさんするし、とてもむずかしい」と振り返り、ごみの削減は簡単にはいかない事を知ったのである。E 児はその後、森林について調べ、人工林で森林を手入れする必要性や国産の木を利用すること、世界の森林の問題も調べ、森に住む動物を守るためにごみを捨てないこと、森や木について知る事も大事だとまとめていた。さらに、社会科『水はどこから』では、と考えてもいた。道徳科『石っこけんさん宮沢賢治』では、「自然はかいはあるけど、はかいしたらいけない場所に、そのきまりをつくるのもいいと思う。そして、ふじさんみたいにきたなくなると動物もだめになるから、山にごみをすてないというきまりもつくった方がいい」と、ごみを捨てさせないようなきまりを作る必要性もあると言及するようになっている。

以上から、E 児の思考は「森林」というキーワードをもとに三つの教科を横断していると考えられる。E 児は「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続け」（文部科学省 2018c:10）ており、森林を通して社会に目を向け、自己の生き方を選択・判断する事に迫ることが出来ていたと考える。

7. おわりに

本研究では、社会に目を向ける子どもを育てるために、社会科、道徳科、総合的な学習の時間において教科等横断的な視点から授業づくりを行った。これらに関連付ける事で、どのような現代的な諸課題が身近にあるのかを子ども達が知り、外部の専門家との体験活動から現代的な諸課題についての学びを深め、実生活とつなげながら自分たちの問題として他者と協働して考えていく場面を設定した事で子どもに「見えにくい」相互関係を中心とした「社会に向ける目」を育てる事ができたのではないかと考える。これらは共に、教材を通して具体化した上で、調べ学習や学習場面での発問等によって、選択・判断を求める授業づくりを行ったことで、授業に現れてくることを確認できた。

今後の課題としては、本研究で取り組んだ子ども自らが社会に目を向け、自己の生き方について考える子どもの育成を道徳教育との関連を図りながら他教科の学習にも広げ、教科等横断的な視点で授業をつくるために、より有効な手立てを探究したい。

引用文献

- 文部科学省, 2018a, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)』東洋館出版社。
 文部科学省, 2018b, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき。
 文部科学省, 2018c, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社。
 押谷由夫, 1999, 『新しい道徳教育の理念と方法—夢と希望と勇気をはぐくむ—』東洋館出版社。
 霜田一敏・有田和正, 1973, 『市や町のしごと』国土社。
 鈴木正氣, 1978, 『川口港から外港へ』草土文化。
 上地完治, 2020, 「SDG s の学習が道徳教育にもたらすもの」『どうとくのひろば：日文教育資料 [道徳]』
 27: 2-4, (2022 年 11 月 26 日取得, <https://www.nichibun-g.co.jp/library/dotoku-hiroba/dotoku-hiroba27.pdf>)。
 上田薫, 1952, 『社会科の理論と方法』岩崎書店。
 若狭蔵之助, 1984, 『問いかけ学ぶ子どもたち』あゆみ出版。